五月五雲能

五月十四日（土）
午後一時始
正午開場
於　宝生能楽堂

演目の解説

能「八島」（やしま）

旅の僧が、八島の浦で老若二人の漁師に出会います。僧が一夜の宿を乞うと、初めは断られてしまいますが、老人は僧が都の人と聞いて、泊めることにします。暫し都を懐かしんでいた老人に、僧が古の源平合戦の有様を尋ねると、老人は源義経の戦の様子、景清と三保谷四郎の錣引きのことを詳しく語ります。あまりに詳しいその語りに不審を抱く僧に老人は義経と仄めかして消えてしまいます。その夜、僧の夢の中に義経は在りし日の姿で現れ、流した弓を取り返したこと、また修羅道の苦しみを再現します。修羅能の大作。

能「杜若」（かきつばた）

今を盛りと咲き誇る杜若。三河の国八橋を訪れた僧は、一人の女に呼び止められます。女は業平が東下りの途中で、この八橋で詠んだ杜若の歌の話をし、自宅へ僧を招きます。その夜、女は昔、業平が宮中での豊明節会で身に着けた高子の后の美しい衣と、冠を身に着けて現れます。不思議に思う僧に、女は我こそは杜若の精であると明かし、業平の東下りの様を舞って見せ、草木国土悉皆成仏の喜びを僧に告げると、夜の白むと共に消え失せます。

能「歌占」（うたうら）

初めに父の病気の容態を知りたい男と、父の行方を尋ねる子が登場します。不思議とよく当ると言われる歌占いの神主に占ってもらおうと待っているところに、いくつもの短尺を下げた小弓を持ち、髪の真っ白な神主が行き逢います。男は神主に声をかけ、早速占ってもらうと、神主は男の選んだ短尺の歌を元に、重篤な病気ではないから心配はいらないと告げます。父の行方を尋ねる子も続いて占ってもらうと、父には既に会っているという卦が出、その神主こそ父であることがわかり、神主は地獄の有様をクセ舞に舞い、一緒に故郷へ帰ってきます。

能「八島」（やしま）

旅の僧が、八島の浦で老若二人の漁師に出会います。僧が一夜の宿を乞うと、初めは断られてしまいますが、老人は僧が都の人と聞いて、泊めることにします。暫し都を懐かしんでいた老人に、僧が古の源平合戦の有様を尋ねると、老人は源義経の戦の様子、景清と三保谷四郎の錣引きのことを詳しく語ります。あまりに詳しいその語りに不審を抱く僧に老人は義経と仄めかして消えてしまいます。その夜、僧の夢の中に義経は在りし日の姿で現れ、流した弓を取り返したこと、また修羅道の苦しみを再現します。修羅能の大作。

能「杜若」（かきつばた）

今を盛りと咲き誇る杜若。三河の国八橋を訪れた僧は、一人の女に呼び止められます。女は業平が東下りの途中で、この八橋で詠んだ杜若の歌の話をし、自宅へ僧を招きます。その夜、女は昔、業平が宮中での豊明節会で身に着けた高子の后の美しい衣と、冠を身に着けて現れます。不思議に思う僧に、女は我こそは杜若の精であると明かし、業平の東下りの様を舞って見せ、草木国土悉皆成仏の喜びを僧に告げると、夜の白むと共に消え失せます。

能「歌占」（うたうら）

初めに父の病気の容態を知りたい男と、父の行方を尋ねる子が登場します。不思議とよく当ると言われる歌占いの神主に占ってもらおうと待っているところに、いくつもの短尺を下げた小弓を持ち、髪の真っ白な神主が行き逢います。男は神主に声をかけ、早速占ってもらうと、神主は男の選んだ短尺の歌を元に、重篤な病気ではないから心配はいらないと告げます。父の行方を尋ねる子も続いて占ってもらうと、父には既に会っているという卦が出、その神主こそ父であることがわかり、神主は地獄の有様をクセ舞に舞い、一緒に故郷へ帰ってきます。

13:00

八島

シテ　野月　聡　ツレ　東川　尚史

ワキ　則久　英志

ワキツレ　大日方　寛
〃　御厨　誠吾
間　金田　弘明

後見　宝生　和英
佐野　弘宜

地謡　木谷　哲也
金井　賢郎
金野　泰大
辰巳　大二郎
高橋　憲正
金井　優資
水上　優
亀井　雄二

大鼓　原岡　一之
小鼓　森　貴史
笛　杉　信太朗

14:30

二九十八

三宅　近成

前田　晃一

〈休憩十五分〉

15:05

杜若

シテ　上野　能寛

ワキ　安田　登

後見　藤井　雅之
内藤　飛能
田崎　甫

地謡　石塚　尚寿
藤井　秋雅
今井　基
金森　良充
小林　晋也
大友　順
渡邊　茂人
藪　克徳

〈休憩十五分〉

16:40

歌占

シテ　和久荘太郎　ツレ　川瀬　隆士
子方　大坪　海音

後見　武田　孝史
小倉伸二郎
石黒　空

地謡　鶴田　航己
朝倉　大輔
辰巳　和磨
金森　隆晋
澤田　宏司
佐野　登
高橋　亘
當山　淳司

大鼓　亀井　洋佑
小鼓　住駒　充彦
笛　熊本俊太郎

終演予定十七時四十分頃

チケット料金（税込）

全席自由席
一般　5,500円
学生　2,750円
（当日要学生証提示）

ご購入は、各能楽師
または
オンラインチケット
・宝生会事務局まで